

1-1 竹取物語 その2-1

翁はこの子を家に連れて帰り、大切に育てました。すると不思議なことに、翁はしばしば竹の中に黄金を見つけるようになり、しだいに豊かになりました。

このちご、養ふほどに、すくすくと大きくなりまさる。
この幼い子は、育てるうちに、ぐんぐんと成長していく。

三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、
三か月くらい過ぎた頃には、一人前の大ききの人になったので、

髪上げなどとかくして髪上げさせ、裳着す。
髪上げの祝いなどをあれこれして髪を上げさせ、裳を着せる。

この子は輝くばかりに美しく成長し、「なよ竹のかぐや姫」と名づけられました。かぐや姫には多くの男性が求婚してきました。特に熱心だった五人の貴族の若者の一人一人に、かぐや姫は結婚の条件を提示しました。それは「蓬萊の玉の枝」「火鼠の皮衣」「竜の首の玉」などの、この世に存在するかどうかわからない伝説上の品々を持つてくるという難題で、誰も果たすことができませんでした。

その後、帝からも求婚されましたが、かぐや姫は応じませんでした。それから三年ほどたった年の春頃から、かぐや姫はもの思いにふけるようになり、月を見て泣くことが多くなりました。翁がその理由を尋ねると、姫は「私は月の都の者なのです。八月十五日には迎えが来て、月の都へ帰らなければなりません」と答えました。翁からそのことを聞いた帝は、二千人の兵士を遣わして家を守り固めました。やがて、夜中の十二時頃、辺りが昼間よりも明るくなり、大空から雲に乗って、天人たちが降りてきました。

大空より、人、雲に乗りて下り来て、
大空から、人が、雲に乗って下りてきて、

土より五尺ばかり上がりたるほどに立ち連ねたり。
地面から五尺ほど上の辺りに立ち並んだ。

これを見て、内外なる人の心ども、
これを見て、(家の)内や外にいる人たちの心は、

ものにおそはるるやうにて、あひ戦はむ心もなかりけり。
何かに襲われたようになって、対戦しようという気持ちもなくなった。

▽ちごとは 幼い子 おさなご

▽髪上げとは 女子の成人の儀式

▽かぐや姫が五人の貴族の若者(貴公子)に提示した結婚の条件すなわち難題とは何か、資料集やワークから調べてみよう。

貴公子	難題の品	成否	このことから生まれた言葉
石作の皇子	仏の御石の鉢	失敗	鉢を捨つ 恥を捨つ(あつかまし)
くらもちの皇子	蓬萊の玉の枝	失敗	玉の枝 たまさかに(たまたま姿を現す)
右大臣阿倍御主人	火鼠の皮衣	失敗	阿倍なし あへなし(遂行できずがっかり)
大納言大伴御行	竜の首の玉	失敗	食べがた たべがた(道理に合わず常識外れ)
中納言石上磨足	燕の子安貝	失敗	貝なし 甲斐なし(期待に反する)

▽八月十五日とは何なのだろうか。

中秋の名月

旧暦(太陰太陽暦)での季節と月名の関係は、節切りにすると、一・二・三月が春
四・五・六月が夏七・八・九月が秋、十・十一・十二月が冬となる。文字通り秋の
なかほどにある満月(秋分に近い満月)をさす。

▽五尺とは、どの程度の高さなのか。

約150cm 一尺≒約30cm 十寸≒一尺

▽内外なる(家の)内や外にいる

「家の中にいる人であっても外にいる人はもちろん」あたりの意味かー内外問わず

※言葉遊び(言葉の由来をかもしている)とされる

国語学習プリント

古典

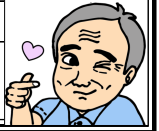
date : 年 月 日

学習内容 : 言葉あそび(いわれ) + α

年 組 番

「竹取物語」その2の2

氏名



人々が、なすすべもなくぼんやりと見守っていると、天人は翁を呼び出し、「姫は天上で罪を犯したので、しばらくけがれた地上にいたことになったのだ。今はその罪も消えたので、呼び戻すことになった。」と伝えました。天の羽衣を着せて少しでも早く月の世界へ連れ戻そうとする天人を制し、かぐや姫は泣き悲しむ翁たちに別れを告げました。そして、帝に宛てた手紙と不死の薬を帝の臣下に渡し、天人の言葉に従います。

① ふと ② 天の羽衣うち着せたてまつりつれば、
③ (天人がかぐや姫に) さっと天の羽衣を着せてさしあげると、

翁を、「いとほし、かなし。」と思しつることも失せぬ。
翁を、「気の毒だ、いたわしい。」とお思いになつていたこともなくなった。

この衣着つる人は、もの思ひなくなりにつれば、
この天の羽衣を着た人は、もの思いが消えてしまうので、

車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ。
(そのまま飛ぶ) 車に乗って、百人ほどの天人を引き連れて、(天に)昇っていった。

帝は、かぐや姫から不死の薬を贈られていたが、かぐや姫のいないこの世にいつまでもとどまる気がしない。そこで、「どの山が天に近いか。」とお尋ねになるとある人が、駿河の国にある山が、都からも近く天にも近いとお返事申しあげたので、その山に使者をお遣わしになった。

御文、不死の薬の壺並べて、
(帝は) お手紙と、不死の薬の壺を並べて、

火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。
火をつけて燃やすようにと、命令になった。

そのよしうけたまはりて、士どもあまた具して
その旨を承つて、(使者が) 兵士たちをたくさん引き連れて

山へ登りけるより、その山を「ふじの山」とは名づけける。
山に登った(い)ところからその山を「富士山」と名づけたのである。

① その煙、いまだ雲の中へ立ち上ると、言ひ伝へたる。
その煙は、いまだに雲の中へ立ち上っていると、言ひ伝えられている。

▽ ふと 〓 さっと

▽ 天の羽衣とは何なのだろう。またその効果とは？

天界と地上を隔てるものの象徴

この羽衣をまとうと天上界の者となるため下界での記憶が消えてしまう。つまりもの思い(気がかりなこと)も消えてしまう。

▽ いとほし、かなし

いとほし 〓 気の毒だ。かわいそうだ。
かなし 〓 ふびんだ。かわいそうだ。

教科書では「気の毒だ、いたわしい。」と訳している。
※いたわしい 〓 ふびんだ。かわいそうだ。

▽ 具し 〓 「具す」の連用形 具す 〓 引き連れる

▽ ぬ 〓 「完了」の助動詞 〓 した

▽ よし 〓 「理由。いわれ。わけ。手段。方法。手だて。事情。いきさつ。」
などいろいろな意味として使われる語。この場合は、

心持ち(お考え)ぐらいに考えるとよいだろう。

▽ 仰せ 〓 おっしゃる 命じる

▽ たまふ 〓 おおになる。

▽ うけたまはり 〓 ご承諾申し上げ

▽ あまたの意味とは？

漢字で書くと「数多」

▽ 「ふじの山」という名前の由来とは？

古典文 士どもあまた具して山へ登りけるより
士に富む山 〓 富士山

不死の薬を焼かせた山 〓 不死山と思われておいてからの士に富む山だから「富士」と、ふじの語源をお知らせ。言葉遊びの延長線上にある。
現在、我々もふじの山を富士山と表記している点をいまま、名付け親にも思えてしまう。

▽ その煙、いまだ雲の中へ立ち上る からわかる事象とは？

この物語が書かれた当時(平安期)富士山は火山活動していたらしい

◆ 「その他の言葉遊び 先生案」 かぐや姫の名付け親は御室戸齋部(みむろどいむ)の秋田(あき)たであり、その理由を「なよたけのごとくしなやかで輝くような美しさ」であったためとしている。つまり、かがや姫かぐや姫。このころの人々は普通に「かぐや姫」と聞けば、かがはし(においたつぽと美しい)姫であると思うことを逆手にとって、視覚効果を付加したいという美しさをかもしだそうとしたのかなと思ふ。